



生きがい情報士通信

Vol.15 2009.6

発行 (財)健康・生きがい開発財団

記事

- ① 新理事長あいさつ
- ② 平成20年度生きがい情報士研究集会報告
- ③ 平成20年度生きがい情報士研究集会報告
- ④ HPがリニューアル&生きがい情報検索支援システム
- ⑤ 生きがい情報士 in mixi が誕生
- ⑥ 助成金事業報告
- ⑦ 講師養成研修会報告
- ⑧ 情報士紹介 / 平成21年度予定

新理事長就任ごあいさつ



平成21年度の役員会で金田一郎理事長が退任
辻哲夫理事長が着任いたしました。

辻 哲夫

プロフィール

東京大学高齢社会総合研究機構教授
田園調布学園大学客員教授

[情報士誕生の背景]

厚生省 老人福祉課長の時に、これから訪れる超高齢社会に高齢者が元気で生き生き生活する“生きがい”のある生活を送る社会を作る必要があると思い、有志で勉強会をしていました。生きがいを持てる環境をコーディネートする専門家を養成しなくてはという思いで、健康生きがいづくりアドバイザーの誕生に取り組みました。またこの専門家の養成は、役所がするのではなく民間が養成する必要があるという事で1991年に民間企業のかたの協力で健康・生きがい開発財団が設立されました。20年ほど前健康生きがいづくりアドバイザーの第1回目の研修会に参加し、講義したことを昨日のように覚えています。

[必要とされる生きがい情報士]

高齢者に必要とされる生きがいとは、人に与えられるものではありません。自らが獲得するものです。高齢者になった方たちの活動を支援するためにはきっかけづくり（情報提供）が必要となります。そこで健康生きがいづくりアドバイザーに続いて、“生きがい”づくりの支援のために“情報提供”などをする人材として生きがい情報士が誕生いたしました。生きがい情報士は、熟年期以降の人たちと接触する機会の多い専門職を対象として社会福祉援助技術を基にカウンセリング、仲間作りなどの支援技術を習得してもらうものです。これからの社会は、ほとんどの職域で高齢者とかわりを持ちます。だからあらゆる分野で生きがい情報士が必要となります。医療、ケア分野だけではなくアスレティック、「食」の場など余暇活動の場でも“生きがい”支援が必要となります。

生きがい総論にもありますが一人称の生きがい（1対1）、二人称の生きがい（2対2）、三人称の生きがいがあります。この中で熟年期の生きがいには三人称の生きがいが必要で最も重要です。人とともにコミュニティーで生きがいを見つけ継続できるようにすることです。生きがいは、仲間作りがキーワードとなります。仲間作りを支援する力量が問われるのが生きがい情報士であり、「世話人機能」を持ってほしいものです。

[熟年期に必要な情報提供と生きがい情報士の役割]

人間は、人と人との交わりの中から自分が見えてきます。様々な人との交わり中に生きがいがあります。仲間とともに過ごすことで生きがいが継続されます。仲間作りのきっかけづくりには、情報提供が必要なのです。その情報を提供するのが生きがい情報士の役割といえます。仲間とどのようにかわるかを支援する、このために特にカウンセリング技術や仲間作りなどの援助技術が必要とされます。高齢期になり医療、ケアが必要となっても元気な時に生きがいを見つけた人は、生きがいを持って老いていきます。遅くとも熟年期前期世代から自分の生きがいづくりをすることが望ましいのです。そのために生きがい支援できるのが生きがい情報士であり、その活躍が必要なのです。

[新しいHPについて]

生きがいを自ら獲得するために様々な情報を得ることが大切です。そのためにも生きがい情報士が生きがい支援するためのホームページに期待をします。生きがいを求めるいろいろな方たちが入ることのできる開放性のあるホームページとなるのが大切です。またこのリニューアルで生きがい情報士の交流の場ができたことは良いことです。交流の場を通して専門職の能力を高めるために経験を共有してほしいものです。